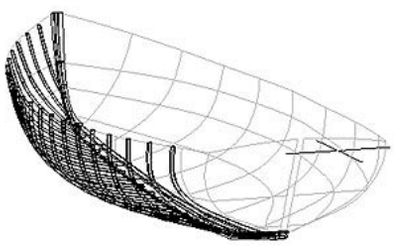


# Building the Herreshoff Dinghy

ハレショフディンギーを作る

Herreshoff Project/Timberline Publisher

## ハレショフディンギーを作る （Building the Herreshoff Dinghy）

ハレショフ製作所の職人だったチャーリー・シルベスターをバリー・トーマスとマイナード・ブレイが訪れたのは１９７４年の事です。そのインタビューを元に翌年の暮れから、ミスティーク・ミュージアムの小型船工房で、バリーは収蔵品の１９０５年製ハレショフ・ディンギーのレプリカを制作します。その過程でこの本は作られました。５０ページあまりのコンパクトな本にディンギー製作の粋が収まっています、初版の出版は１９７８年です。

以来８刷と版を重ね、この本は多くのボートビルダーたちに読みつがれてきました。ミュージアムでの復元作業から得られた生きた情報、シルベスターとのインタビューで得られた、それまでは知られてなかったハレショフ工房の製作技法が大きな魅力です。

ハレショフ製造所（造船所）はジョン・プラウンとナサニエルのハレショフ兄弟によって始められ、１９世紀末から２０世紀初めにかけて、多くのすばらしいヨットを作りました。それらは幾つかのアメリカズカップ常勝艇を含んでいます。帆走性能、デザインの新しさ、なによりラインの美しさは他に類を見ません。
この本で語られているボートは、そのカップ・ディフェンダー艇コロムビア（1899 年建造）のためのディンギー（コロンビア・ライフボートモデル・ディンギー）です。

チャーリ・シルベスターは全盛期のハレショフ製作所の職人として､ほとんど全てのハレショフ・ディンギーの制作に携わりました。彼の手によった多くのディンギーや、その制作の記録をみれば、彼がとても優れた職人であったことがわかります。彼の父も　親戚の多くも東海岸の船大工でした。

バリー・トーマスはミスティーク・ミュージアムの小型木造船工房の専属として、数多くの美しいボートの修復、 作成に携わりました。この本のほかにも｢ロフティング･マニュアル」「ケープコッド・キャットボートを作る」の著作があります。

バリーの簡潔な文章はハレショフ製作所でのディンギー製作方法を、多くのイラストを使いながら、わかりやすく説明しています。それはとても合理的で、美しい船を作りたいと思うものなら必ず知っておかねばならない様々の知識を含みます。
エポキシ樹脂に代表される化学の進化はボート作りを変えました。頑丈で、手間のかからない船をいとも簡単に量産する事が可能になりました。経験と熟練を必要とする作業は、均質な労働に変わっていきました。でも、ほんとうに美しい船は手カンナの感触やスチームボックスのオークの匂いからしか造れません。この本は美しい船たちが滅びてしまわないためのガイドなのです。

これは不思議な本です。技術のコトバで書かれながらも、読み進める内に不思議な心の動きが連動するのです。読んでいる時にふと、シルベスターたち職人が活躍した時代の、その製作の時間の中へ入り込んでいくような感覚に触れさせてくれるのです。それはボートを作っている時にもふと感じる感覚です、その時間を感じる時　同じ時間のなかで無数のシルベスターたちが共に製作していることに気付くのです。

最も美しいヨットが作られた時代は　南北戦争の後、ニューヨークのシティ・アイランド周りの造船所や、ローデ・アイランド州ブリストルのハレショフ製作所、ボストン南岸のロウリー造船所等ではじまり､東へと広がっていった。第一次大戦後､それは衰亡の兆しを見せる､原因の一部は戦争の影響である。それは質の低下としてあらわれた。恐慌がそれを加速した。いま、これらの工房はない。ロウリー、ハレショフ、ネヴィンス、そして多くのより小さな工房、制作技術自体が、事実上なくなってしまった。知識は単なる歴史の中に埋もれてしまうか、知らない人の手に渡ってしまうか、あるいはもっと悲惨な状態にあった。

だからこそ、我々はミスティーク博物館で、その全盛時のボート制作の記録をなにか残してみたかった‥もし情報源さえ見つかるならば‥　幸いなことに情報源は見つかった。ハレショフ製作所の全盛時に制作に携わっていた人が見つかったのだ。そして　それは我々に　ユニークなボート製作の本を作るチャンスをあたえてくれた。なぜなら、ハレショフでの制作法は他と異なる独特のものだったからである。

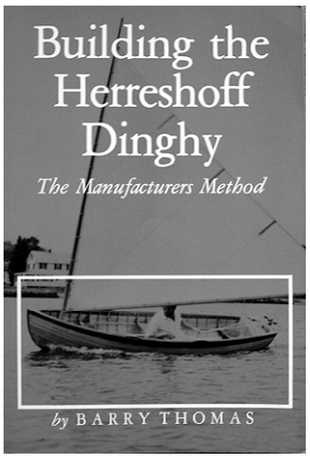
バックグラウンド

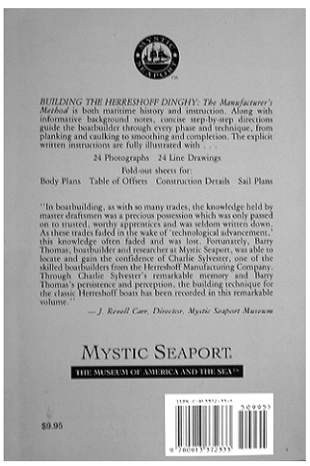
ハレショフの制作方法は　ボートのそれぞれのフレーム（肋材）ごとに木型を作り（ディンギーの場合はフレーム一つおきに木型を作ることとなるが）木型を上下逆においてその型の上でフレームを曲げるというものである。木型を逆に置いたことで、多くの作業が簡単になり、早くなった。プランキング（外板張り)、コーキング、研磨作業、等々である。これはプロダクションのセットアップとしてはいい方法だ。前に作ったボートを　しばらく経てから、またいくつか作る時は　収納していた型を取り出し　簡単なセットをするだけでいい。

我々の情報源となってくれたのはチャーリー・シルベスターである。チャーリー・シルベスターはハレショフで１９１２年から働きはじめ、１９４０年に退職した。携わってきた工芸技術の細部にいたるまで、驚くほどかれは詳細に覚えていた。かれが自分の仕事に自覚を持って取り組み、身体の動きも　時間の使い方も　すべて理にかない　無駄のないものとなるまでに技を研ぎすましてきたことは疑いない。いいものを作らなくてはならないのだ。チャーリー・シルベスターはその時代、特に特殊な人間であったわけではない。ただ　かれはナサニエルと共にハレショフ製作所を支えてきた「昔気質の技術者」の一人であった。

外部の構造や内装に携わる木工職人、プランキングの専門家、マスト制作者、型紙作り、鋳物職人、索具職人、機械工、ハレショフのような製作所には船を造るに必要な職人がすべてそろっていた。経験と知識にかけて　それは大学のようなものだといえる。修得することはいくらでもあり、興味を持つものなら博士号にも相当する知識と経験を得られただろう。
もはやこのような製作所はアメリカには存在しない。知識も存在しない。この種の大学は絶滅したのである。

１９３０年代後半が最終章だった。本当にいいものが作れる人々はほんの一握りだった。木と木とを合わせて、継いで、美しい曲線を造る‐‐ボートの美しさのほとんどはこれらの人たちの手によるものなのだ。アイデアを完璧なまでに肉体化し、実体に作り上げた職人たち



の名前は忘れ去られてしまった。これは正しいこととはいえないが、よくあることなのだ。これらの人々は彼等の仕事に誇りと愛着を持ち、情熱を傾け、質の高さということに執拗なまでにこだわりを持っていた。

チャーリー・シルベスターは１９２０年から１９４０年にかけて、MIT ディンギーをのぞくほとんど全てのハレショフ・ディンギーを製作していた。また、メカニックとして他の仕事にも携わったので、他のエリアの仕事にも経験を積んでいた。

情報源

このレポートの全ての情報はチャーリ・シルベスターによる。
マイナード・ブレイとバリー・トーマスが彼と会い　聞き取りをおこなった。
インタビューは１９７４年　シルベスターの自宅で行われた

チャーリー・シルベスターは１９１２年、彼が１６歳の頃にハレショフで働きはじめた。（写真）１９０５年に亡くなった彼の父親も前からそこで働いていた、家族はメインの南ブリストルからローデ・アイランドのブリストルに移ってきた。シルベスターの祖父の兄弟は南ブリストルの船大工、ハービー・ギャメージの祖父であった。

１９２４年　ビジネスの不振と会社整理を受けて、チャーリ・シルベスターや、ハレショフ製作所の他の従業員には職がなくなった。後に彼はハレショフに戻ることとなる。その間、１年弱ほどかれはニューヨーク、シティ・アイランドのネヴィンスやローデ・アイランド、イースト・グレニッジのノックで働いた。１９４０年に彼はハレショフを最終的に退職した。

他の情報源は　ハレショフ・ディンギーをを製作した我々自身の経験である。これは、最初１９０５年に作られた、１１フィート半のコロンビア・ライフボートモデル・ディンギー（名前は１８９９年に製作されたアメリカズカップ・ディフェンダー艇のために　デザインされ作られたところに由来する）である。１９０５年というのはシルベスターがいた時代からは数年前の話であるが、ディンギーは彼の話をあらゆる面で補強してくれた。写真の多くは１９７５年から７６年の冬にかけて、ミスティーク・シーポート博物館でこの船が製作された時に撮られている。復元作業は情報のもつ意味を改めて把握し、深く理解することを可能にしてくれた。